

第 33 回日本受精着床学会（東京）

妊孕性温存：男性（精子凍結）

中村祐介、松川 望、坂本 里、朽木美和、佐藤祐香里、服部 裕充、中條友紀子、青野展也、橋本朋子、土信田雅一、戸屋 真由美、京野 廣一

目的：近年、若年がん患者が増加傾向にある一方、医療の発達によりがんを克服する患者が増加してきている。生殖可能年齢での抗がん剤使用および放射線照射は患者の生殖機能を著しく低下させてしまう。患者の QOL(Quality Of Life)について関心が寄せられている中、泌尿器科医師や患者の妊孕性温存に関する意識が高まり、化学療法前に精子凍結を行うことが増加してきている。今回我々は、妊孕性温存目的で精子凍結された症例について検討した。

方法

1997 年 11 月から 2015 年 6 月までに当院で妊孕性温存を目的として精子凍結を行った 143 症例を対象とし検討を行った。

結果

凍結希望者の平均年齢は 30.4 ± 8.2 歳で 53 名(37.1%)が既婚、90 名(62.9%)が未婚だった。来院時の状況としては、化学療法前が 99 名(69.2%)、化学療法後が 29 名(20.3%)、全身放射線治療前(骨髄移植前)が 9 名(6.3%)、その他が 6 名(4.2%)だった。がんの種類別の内訳は精巣腫瘍 45.5%、白血病 18.9%、悪性リンパ腫 7.7%、骨髄異形成 4.2%、縦隔腫瘍 3.5%、直腸がん・大腸がん 3.5%、前立腺がん 2.1%、その他 14.7%となっている。現段階で死亡した方が 6 名(4.2%)で、その他に関しては精子凍結継続あるいは精液所見の回復や自然妊娠が得られ、患者の申し出により廃棄処理を行っている。悪性腫瘍治療最終後に当院で ART 治療を行った方は 24 名で、そのうち 6 名が妊孕性温存で凍結した精子を使用して妊娠が確認された。4 名が化学療法後の新鮮射出精子により ART 治療を行い妊娠が確認され、1 名が化学療法後に Micro TESE で精子回収後の ART 治療により妊娠が確認された。

結論

がん治療は使用する薬剤や放射線照射などの治療方法によって、永続的な無精子症となる可能性がある。当院でも化学療法後に精液所見が正常まで回復した症例も見られたが、無精子症あるいは乏精子症、無力症となった症例も見られた。化学療法後に凍結しておいた精子で ART 治療を行う患者もおり、患者の QOL を考えたとき化学療法前の妊孕性温存目的の精子凍結は必須であると考えられる。